

紙 縫 り

お島といふのが彼女の名であつた。お島が初めてそこへ奉公したのは彼女が十五の夏であつた。

初めての日は、旦那様の脱いだ靴を磨いて置くやうに奥様から言ひつけられて座を離れたもの、刷毛の使ひ方もろくに知らないお島は、勝手を出ると、靴を其処へ置いたまゝ、そこに青空へ咲き出た合歡の根元に踞んで痺れのきれた足を暫く擦つてゐた。

上たかの方の夕飯がすむと、ぢきに初めての御飯をいたゞいた。真白な温い御飯を、美味いお菜でたらふくつめると、お島はぢき居眠りが出てしやうがなかつた。眠たい眼を擦り／＼奥様に連れられて、数多い戸締りや門の門の工合などを教はつたが、容易に覚へきれそうもなく夢中でたゞへい／＼返事ばかりしてゐた。

翌る日、午飯の片付けが了ると風呂をたてるので、教はつた通り湯殿へ入つて湯槽を洗つた。湯槽は真新しい四角な大きなものだった。栓を抜かうとして小さな体を湯槽の椽へ掴まつたまゝ、俯向かせる拍子に、底があまり深かつたので、お島の小さな体は鬩斗とら打つて湯槽の底に落ちこんでしまつた。

けたたましい悲鳴を聞きつけて奥様が馳せつけて見ると、肩から袖へかけて半面ぐつしよに濡れたお島は、蒼い顔をしてぶる／＼慄へて湯槽の中に立つてゐた。

又或る暮れ方、奥様がお座敷へ入つてゆくと、薄暗い座敷の真中に寝てゐる黒いものに愕かされて大声をあげた。黒いものはむくむく起上つて、驚いてまあと言つた。戸を閉めにお座敷へ入つて来たが、あまり広いお座敷なので、こんなお座敷に一度寝て見たらと思つて横になると、つい眠つてしまつたのだと、お島は顔を赫らめながら詫びた。

「あれは余程妙な子ですよ」と奥様はよく旦那様に話した。それが二年三年とたつうちに、人が変つたやうに気がきいた働き者になつた。口のき、方から、髪結び方着物の着こなしまで、一分の隙のない立派な女中になつて、時々畑でとれた牛蒡や大根を持つて訪ねてくるお島の父親も、上り框に腰かけて娘と話しながら、つい間違へて馬鹿丁寧な返事などをするので、お島は転げまわつて笑つた。

「人はほんとに仕込みやう一つですな」
お島の初めからを知つてゐる奥様の友達は、かういつてお島の事を賞めた。

「でもつまりませんわ、あれもそろ／＼お嫁に貰はれそうなんですよ」

奥様は、いかにも惜しそうに話した。

「いいえ、私一生こちらさまへ置いていたゞきたうござりませぬ」

などとお島は嫁の話が出るたびに笑つてゐたが、そうにもゆかなかつた。

村内の相応な百姓から懇望されてゐるといふので、やはり合